

美術科

高嶋 裕也

I 研究主題と美術科

1. 研究主題のとらえ方—教科の「目指す生徒像」

美術科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、2年次の実践に取り組んできた。

【美術科の目指す生徒像】

創造活動の喜びを味わい、造形的視点を持って豊かに自己実現していこうとする生徒

美術科は、学習指導要領に示された〔共通事項〕を視点にしつつ、〔A表現〕及び〔B鑑賞〕の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方をはたらかせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標とした教科である。本校ではその具現化のために、色や形、光などといった、生徒を取り巻く様々な視覚情報を造形的な視点で捉え、発想・構想に結び付けたり、新たな考えを自分なりの表現として生み出したりできる学習活動を目指してきた。自分の感覚や考えを表出する際には、漠然としたイメージを言語化することが重要だと捉え、言語活動や、効果的な振り返りを工夫することで、より明確なイメージや計画を持って課題を解決し、豊かに自己実現していくことができるものとする。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる 資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・形や色によるコミュニケーションを通して、生活や社会と主体的に関わろうとする力や態度	・〔A表現〕と〔B鑑賞〕の学習内容を相互に関連付け、それぞれの学びを引き出す課題設定と題材構成
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・造形的な視点で対象をとらえ、よさや美しさ、表現の工夫などについて考え、豊かに発想したり、見方や感じ方を深め、味わったりする力	・〔共通事項〕の視点で対象・事象をとらえる場の工夫 ・イメージを言語化し、発想、制作、鑑賞する場の工夫
場に応じて判断基準をつくる力	・感性や造形感覚を働かせて材料や用具を生かし、表現方法などを工夫して創造的に表す力	・技能や感覚を駆使して試行錯誤、創意工夫する場の設定 ・作りながら見方や感じ方を広げたり、自己の考えを深めたりする場の工夫
学びを評価し、課題を見付ける力	・対象や事象をとらえる造形的な視点について実感として理解し、感性を働かせて創意工夫していこうとする力	・毎時間や学習の区切りでの言語的、視覚的な学びの振り返りの工夫 ・授業での学習の成果を相互に鑑賞する「鑑賞会」の工夫

2. 研究のあゆみ

美術科では、2年次の研究として、生徒がこれまで以上に学んだことの価値や意味を実感し、よりよいものを求めて、授業や生活の中で意欲的にそれらを転移・活用していくことが意識できるような授業を目指すこととした。そのために、時代の変化に合った機器を活用した新たな題材を用いたり、従来使われてきた題材を分析し直したりして、〔A表現〕と〔B鑑賞〕の内容を密接に関わらせながら、発想や構想、技能、鑑賞に関わる資質・能力を育成していくことを重視して研究に取り組んでいく。

美術科では、「よりよいものを求める姿」を以下のように捉えている。〔A表現〕の主に発想・構想に関わる場面においては、造形的な見方・考え方を働かせて、感じ取ったことや考えたこと、目的や機能などを基に、生徒が自ら表したいことを強く思い描き、発想や構想を練ろうとする姿である。主に技能に関わる場面においては、発想や構想したことなどを基に自分の表現を具現化できるように、自分の持っている力を発揮しながら表現方法を選択したり、試行錯誤したりしながら創意工夫して表現に結びつけようとする姿を想定している。また〔B鑑賞〕においては、造形的なよさや美しさ、作者の意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活や社会における美術のはたらき、美術文化などについて感じ取ったり考えたりして、対象の見方や感じ方を広げ、考えを深めようとする姿だと考えている。目指す生徒像にある「～造形的視点を持って豊かに自己実現していこうとする」という部分がこれらにあたりと見え、日々の授業に取り組んでいる。

ただし、見ること、考えること、表現することは、美術の活動では、とても密接に関係しており、実際はそれらを完全に分けてみとめることは難しい。授業を通じて生まれた「造形的視点」を自覚させるために、前研究から継続して行ってきた言語的・視覚的な振り返りを有効に活用しながら研究を進めていきたい。

3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 全校生徒対象のアンケートの結果において、「美術は豊かに生きる上で必要か」という質問に対し、1年次とほぼ同じく全体の98%が肯定的な意見を回答している。美術科の学習活動を通して学んだことが、実際に「自分の生活を豊かにしている」という実感を持っている生徒が、全体の92%であった。美術科で学んだものを見る際の見方や考え方を基にして、部屋の装飾や身の回りの服や道具のデザインなどの美しさや面白さに気付くことができている。
- 「振り返り」については、単なる学習活動の記録だけでなく、学びについて記述することを促し、本時の活動から次時の目標を自ら立てていけるような形式にした。また、文字による記述だけでなく、毎時間変化していく作品を画像でも記録し、蓄積していくことで、言語的かつ視覚的な振り返りを行うことができた。今まで以上に、生徒自身が美術の授業を通じた学びや自己の変容を自覚しながら学習を進めていくことができるようになり、「学びに向かう力」を向上させることができたと考えている。
- ▲授業から離れた場や家庭生活における「行動化」の部分に課題が残った。平成29年度に第3学年だった生徒たちは、平成28年の同時期に比べて、イラストや絵を描いたり、授業作品を手直ししたりすることが増加している。また、家族で美術館に足を運んで美術作品の鑑賞を楽しんだりすることも多いようだった。しかし、平成29年度の第2学年においては「行動化」に関する数値が平成28年度の同時期よりも低くなった。3年次研究では今以上に、学年の実態や発達段階を考慮し、

計画的かつ効果的な課題設定等を考えて実践していきたい。